

事後評価報告書

R4年1月24日(月)

研究種別	重点化研究	
研究課題名	ピラミッドアジサイの新品種育成	
研究期間	H29年度～R3年度（H29：県単、H30～R3：重点化）	
	評価項目	評価点
1	研究目標の達成度	3.6
[評価所見]		
<p>・助走期間も含め足かけ15年の歳月をかけて有望な2品種を選抜できたことは評価に値する。それら2品種の観賞適期を巧みに連携できたことでセット販売等流通末端での商品提供形態のバリエーションを付加した。このことで、新たな市場の開拓が見込まれる。栽培農家には、倒伏性を克服する工夫した栽培方法とセットで普及促進することで生産性を確保できると思われる。残された課題として、速やかに品種登録を済ませ、生産農家での経済生産が早急に開始できることを期待したい。</p> <p>・計画通りに目標が達成されている。新たな品種が選抜され、さらには植栽方法が検討されたことで、ピラミッド型アジサイの倒伏を防ぐことが可能となった。大きな成果であると考えます。</p> <p>・県産オリジナル品種の更なる品種改良を実施し、花卉生産者へのバリエーションの多様化を可能にすることは良いと思う。早期に現地適応の可否を確認し、生産者の所得向上の1アイテムを期待する。</p> <p>・目標と成果が上げられた。今後、生産と販売にどうつなげていくか期待したい。</p> <p>・耐倒伏性にすぐれた違う2品種の育成は産地を盛り上げていきブランド力を向上させる2品種になると思われる。倒伏軽減の剪定や定植間隔などすぐに現場で使える技術の開発は産地の基盤を確立する大切な技術である。</p>		

事後評価報告書

R4年1月24日(月)

研究種別	重点化研究	
研究課題名	ICTを利用した施設土耕トマトの高収益栽培技術の確立	
研究期間	R1年度～R3年度	
	評価項目	評価点
1	研究目標の達成度	3.6
[評価所見]		
<p>・最終年度を迎えた課題として、当初計画していた「変温管理」と「早期定植」、さらにそれらを組み合わせた栽培技術の有効性を立証したことは評価できる。早期定植を実現するための工夫として、前作の畦とマルチを継続使用するアイデアは生産者の省力化に繋がる。しかし、生産者圃場(土耕)では、たとえ接木苗を用いたとしても、同一品目の連作により土壌病害や線虫害等が発生するリスクがあるので、それらの対策も視野に入れたオプション技術が求められる。予め準備しておくことに超したことは無い。現在データ取得中の土壌水分、CO₂、日照時間、温度湿度などを制御する管理マニュアルの草案を早急に作成し、普及組織や生産者と連携し経営評価も含めた現地適応型の栽培体系として確立して頂きたい。</p> <p>・栽培期間を長くすることで収穫量がアップするが、暖房費の支出も大きくなる。本研究で示した変温管理により収量を維持し、暖房費を抑制する方法は有効だと思います。また、土壌水分計を用いた灌水により栽培の維持管理ができ、収量を維持できることを示しており、有益な情報だと思います。</p> <p>・安定生産技術(1)～(3)においては、技術が確立できたのかが不透明。どのような形で現地生産者に周知するのか。生産者においては、経営を圧迫するようなことでは本末転倒なので、どの取組み(作型)が経営に見合っているのか示すべき(燃油高騰)。現地生産者は高齢で、ICT活用が疑問視される。また、施設トマト農家は近年所得低迷しているので、導入が懸念される。抑制定植後の難病「トマト黄化葉巻病」等のコナジラミ類媒介による対策を並行して取り組む必要性が大切ではないのか。</p> <p>・これからの農業に欠かせない研究かと思うので期待したい。</p> <p>・ICTを利用しての高収益栽培で最もネックは燃料費をどこまで抑えられるかだと思うので、それを変温管理によって通常の一定温度よりも抑えることができるのは早植一定よりもとりかかりやすいので産地の維持・活性化につながると思う。</p>		

事後評価報告書

R4年1月24日(月)

研究種別	県単	
研究課題名	露地ナスの側枝更新せん定栽培法の改良	
研究期間	R1年度～R3年度	
	評価項目	評価点
1	研究目標の達成度	4.2
[評価所見]		
<p>・県内主力生産野菜のナスを対象に、既開発技術を基盤に植栽密度や剪定頻度などの様々な要素を効果的に組み合わせることで、高齢農家や複合経営農家でも実効性ある省力的栽培技術を開発したことは高く評価できる。加えて、施肥方法や灌水時間も検討したことで即戦力となる栽培体系として確立されたと思われる。さらに、これまでの主力品種より収益性が見込まれる新たな適合品種の「あのみりのり2号」を選出したことから農家の選択肢も幅が増えた。残された課題として、新たに確立したこの栽培体系をどのように普及促進していくのか、現地適応に向けた取りまとめ(栽培マニュアルの制作など)を計り、普及機関を通じた生産者団体等との連携に基づく普及促進の県単事業等で後押しする必要があると思われる。</p> <p>・労働生産性がどの程度改善されることが望ましいのかという指標が示されていなかったが、うね間・株間を広くとり、週に2回の剪定、施肥の方法を変えることで収量のある程度維持し、省力化に繋げられる栽培方法を示していた。本成果が広く生産者に活用されることを期待します。</p> <p>・取組み課題は非常に良いと思います。畝間、株間を従来より広くすることで、秀品率の向上＝所得UP、経費削減(農薬散布)。従来、1筆＝10a当たり750～800本の栽植本数を2筆＝20a当たり750～800本にすることで農地の保全にもつながる。早急に指針を作成し経営指標を変更すべきである。</p> <p>・労働時間の減少と生産性を上げることは良いことだと思うので、農家への導入が早くできるように期待する。</p> <p>・果樹などがあると整枝が間に合わないことが多いので側枝更新剪定の省力化技術により、剪定時間や収穫調製時間を短縮することができるのは産地の維持に役立つ技術だと思われる。秀品率が高いと収入が多くなり、省力化できるので現場で役立つ技術の開発だと思う。</p>		